仏教企画通信

発行日｜令和3年6月1日　65号

発行所｜有限会社 仏教企画
〒252-0116
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
Tel. 042-703-8641
Fax.042-782-5117

発行人｜有限会社 仏教企画代表　藤木隆宣

Email｜fujiki@water.ocn.ne.jp

現代人の葬儀に対する意識が変化してきていると言われています。中には、葬儀そのものを不要と考える人も増えていると聞きます。実際には一〇年以上前から既に問題視されてきたことではありますが、当初は都市部を中心に起きている現象であったものが、コロナ禍の昨今、全国的な波として押し寄せていると思います。『仏教企画通信』では葬儀への関心、変化の状勢をテーマに何回か座談会を開催し、紙上に発表してまいりました。ところが以前からみてその問題が改善の方向に向かっているとは考えにくいのが現状です。そこで今号では、葬儀に関する座談会記事をまとめたものをご紹介し、今一度問題意識を新たにして頂く機会になればと考えました。

元になる記事は弊紙第14、15号（二〇〇九年・平成二一年）に掲載の「対談　葬儀に対する意識はどう変化しているのか」（前後編）です。弊紙のご連載を頂いております佐々木宏幹先生、椎名宏雄老師、そして宮城県仙台市清水寺寺族、大友淑子さんをお迎えしての対談です。尚、出席者各位のご発言、肩書等は当時のものであることをご理解ください。また本文中に登場する別の号の内容につきましては仏教企画ホームページ上よりご参照ください。

佐々木　今日の対談のきっかけは、仏教企画通信十三号に載せられました「葬儀不要の時代がやってきた」というインタビュー記事です。仙台市の清水寺の寺族・大友さんからのお電話をもとに書かれた記事でしたが、私は、この出来事は非常に重大なことだと思いました。そこで今日は、お電話をくださった大友さん、そしてお寺の住職としてご活躍されながら、同じような問題にも非常に意識的な椎名宏雄先生にお越しいただきました。まずはお二人の自己紹介からお願いします。

椎名　私は、椎名宏雄と申します。千葉県柏市の龍泉院という寺の住職を、ちょうど今年で満五〇年やっております。はじめの頃は檀家が一二〇～一三〇でございました。いま現在、ちゃんと檀家としているものは、三一〇軒。これは私の力というよりも、地域の発展によるところが大きいです。その内訳は、昔からのものが中心として一七〇軒、それから、近辺の都市化したところの檀家が一四〇軒前後という数になっている訳でございます。

昔からの地元の檀家のいわゆる先祖から受け継いで来た葬祭のあり方も、かなり変化しておることは事実でございますが、それと、都市化した方面に住んでいる檀家の人との意識の差、やることの違い、そういうものがよく把握できるという、ありがたい環境になっております。そういったことで何かお役に立つことがあれば、と。

大友　宮城県仙台市清水寺の大友です。もともとは二八〇くらいのお檀家さん。それが二倍、三倍と増えまして、八〇〇軒近くになります。ただ、お寺にはほとんど来られない檀家さんもいます。「お骨を預けたら、荷物預かり所じゃないんだよ」って言うのですが。そういう方もいて、本当のところは七〇〇弱ぐらいです。

佐々木　その檀家さんの中で、遺族になったお嬢さんが、「私も母も無宗教だから、葬儀はしない」の一点張りだった、ということがあったのですね。まず、その辺のいきさつをあらためてお願いします。

大友　ある時、葬儀屋さんから「お宅の檀家の〇〇さん、お父さんが亡くなりましたよ」とお電話がありました。「まずお寺に来てくださるように」と言いましたら、ちゃんといらっしゃったのです。五〇歳ぐらいの娘さんと、優しそうなお婆ちゃんでした。お入り頂いてお話をしたら、枕経を頂きたいということで「では何日にお伺いしますね」ということで、行きました。

方丈さんが枕経から帰ってきて、お葬儀をするものだと思っていたら、翌朝突然、娘さんから電話がきまして、「あの、すいません奥さん、申し訳ないんだけど、私たち無宗教なんです」とおっしゃるのです。

「えっ、あなたのお父さん、お寺大好きで、ここに入ろうと思ってお寺にお墓を建てて、ご実家のご先祖さまの供養のために、ちゃんとお写経なさったものが、お墓にも入ってるんですよ。お母さんはどうされるんですか、仏教徒だったのに」って訊くと「いや、母は無宗教なので、清水寺に入れてしまうと、母が一緒に入れないから、市民墓地を選びました」って言うんです。方丈さんも、「今はお父さんの望みを叶えるのが親孝行で、あなたの時代が来て、あらためて無宗教だったら親を連れて行きますって、市民墓地へ行っても、決して遅いことではないでしょう」ってお話をしたんだけど、かたくなに拒まれてしまいました。そこで終わりになったんです。

それから2～3ヵ月して、「市民墓地が当たりましたので、そこに移させていただきます」って、丁寧に電話がかかってきました。私ちょっと疑問を持って、葬儀屋さんに訊いてみたら、火葬は奥さんと娘さんだけで、妹さんも立ち会わなかったようです。お父さんの兄弟にも、何も言わなかったみたいです。その娘さんだけで、葬儀をしようとしたようですね。今までにない経験だったので、驚きました。

佐々木　方丈さんが行って、枕経までは済んでいるのですね。ですから最初から、無宗教でお寺さんを拒否するなら、なんで枕経までやったのかってことが、ひとつよくわからないのですが。そして、ここの中では、そこの費用の問題が、その五〇歳になる娘さんの頭をよぎったから、お通夜からはいらないっていうことになったのか。こういう現象は、初めてなんでしょうか。

大友　はい、今まで一度もありませんでした。それが立て続けにあと二軒、同様のことが起きたんです。

まず一軒は、本人がお檀家さんだと言って、それこそ何十年とちゃんと護寺会費も納めていたご本人が、「わしは無宗教だぞ」って言っていたらしく、それを葬儀屋さんに言って、病院からすぐ火葬場に行って、お骨にしてしまいました。そして、奥さんも何も疑問を持たないで、納骨しないでいたそうです。

そしたら長男のお嫁さんが、「あら、どうしてお父さんを納骨してあげないんですか」とおっしゃってそこから「だめですよ、お母さん」となって、相談に来られたんです。

そして、「あまりお布施を包めない」とおっしゃるから、「いいんですよ」と本堂に行って、須弥壇にご遺骨をおまつりし、戒名つけて、きちんとお葬儀をさせていただきま

した。そして納骨もさせていただいて、まずは終わったのです。

もう一人の方は、ご主人が亡くなたときに奥さんが近所の人に、「葬式するのに大層お金がかかるんだよ」と言われたらしいです。跡取りの娘さんご夫婦がその話を聞いて、「大金なんか用意できないから」って。それで納骨しないで放っておいていたのですね。

でもやっぱり、これは葬儀しなきゃと。それで、お寺の世話人さんとこに行って、「一〇万しかないけども、和尚さんに納骨してもらいたいと言ってもらえないか」と伝えて来たので、「直接いらっしゃい」と伝えたら、今度はお嬢さんと二人でいらしたのです。

そして「奥さん、お金ないんだけど……」って言うから、「いつ、うちで大きなお金が必要なんて言いましたか。お布施は自分の経済とこれからの生活を考えて包むもんだと。もしその中で余裕があって、生きてるうちに、あぁ、あの時助けてもらったなと思う時があったら、その時に何かしてくれたらいいじゃないですか」って。それで後から戒名をつけてお葬儀をしました。だから、形は違うんですけれども、今年の前半だけで、葬儀しなかったのは三つあったということ。それで、「なんなんだろう、これは」と。

佐々木　はい、ありがとうございました。いま友さんの方から三つぐらい重要な指摘があったと思います。ひとつはいままでに見られなかったような、最初、娘さんがお父さんの葬式を、自分は無宗教だから、っていうことで断ったということ。続いて葬儀や納骨をしないケースが発生している。これは、これからの傾向を物語るのかどうかということです。そしてその裏づけがどうもお布施の金額と関係があるらしいと。噂によると、仙台では、「いくらかかる」と噂が流れている。私も宮城県出身ですから、多少は聞いております。

それから三つ目、これは、世代間によってですね、いままでお爺ちゃん、お婆ちゃんがやって来たっていうしきたりに対して、若い世代はもう、それから脱却しているというような、社会変化、世代変化を表しているのかどうか。これは、非常に重要だと思いますね。で、これはあとでまた分析したいと思います。

そこで椎名先生、柏市は人口がどんどん増えている場所だと思いますが、今のお話を聞いてどういうご感想を持たれたのか、何か事例があったらご披瀝いただきたい。

椎名　今までなかったことすと、単発的に偶然三つがあったということですね。それ大事なところだと思うんですが。私の知っている範囲ですが、東京のご寺院さんに聞きますと、数年前からいわゆる『直葬』的なものが少しずつ増えてきているということを言っています。その場合、どういう風に対応しているのか、ここが大事なところなんです。

ある知人は、「儀礼をちゃんとしないと、仏さんになれないんだよ。仏さんになれないとご先祖さまとして浮かばれないんだよ」というようなことをいくら言っても「父も無宗教だったし、自分も無宗教だ。だからそんなことは一向に構いません、ただお墓に入れてもらえればいいです」というようなことを言われて非常に困ってしまったと。なんとか読経だけはして、お授け的なものだけはやって、お戒名は、なかば強制的につけるようにした、と聞きました。いろいろ、ご苦労されているようです。

私のところは、今のところ「直葬」的なものはありませんが、いわゆる「家族葬」的なものが、都市化していると

佐々木宏幹氏

が続いてあったと言われましたが、その方々は、横の直接的なつながりは、まったくないのですね。

大友　はい。みなさんお知り合いじゃないです。

椎名　そうしまして、単発的に偶然三つがあったということですね。それ大事なところだと思うんですが。私の知っている範囲ですが、東京のご寺院さんに聞きますと、数年前からいわゆる『直葬』的なものが少しずつ増えてきているということを言っています。その場合、どういう風に対応しているのか、ここが大事なところなんです。

ある知人は、「儀礼をちゃんとしないと、仏さんになれないんだよ。仏さんになれないとご先祖さまとして浮かばれないんだよ」というようなことをいくら言っても「父も無宗教だったし、自分も無宗教だ。だからそんなことは一向に構いません、ただお墓に入れてもらえればいいです」というようなことを言われて非常に困ってしまったと。なんとか読経だけはして、お授け的なものだけはやって、お戒名は、なかば強制的につけるようにした、と聞きました。いろいろ、ご苦労されているようです。

私のところは、今のところ「直葬」的なものはありませんが、いわゆる「家族葬」的なものが、都市化していると

ころに住んでいる檀家では増えてきております。今年になって、もう三軒ぐらいありました。一番簡単なのは、一緒に暮らしていた家の人だけというケースもありました。「それでいいですか」って聞かれたので、「いいですよ、それはあなたや、亡くなられた方の問題なんだから。大事なことは儀式をやることです。それで仏さんになっていただくことだから、いいですよ」ということで認めておりますので、今まで儀礼なしのものはひとつもございません。

ですが、やはりこれからは、増えてくる可能性があると考えております。寺離れという現状は、やはりどこでも同じだと思います。私のところは護持会費の依頼を施食会の案内と同時にするんですが、毎年、滞納者が増えてきています。これは地元じゃなくて、やはり都市部に住んでいる人ですね。

そういうことからして、寺離れはやっぱり進んでおりますね。寺報をいくら送っても、何をしても、もう、見たり聞いたりする耳を持たない、そういう人がもう、都市に住んでいる人の中には確実に増えているようです。

佐々木　はい、ありがとうございました。東京近郊の柏市でなにが起こっているのかということを、かいつまんでご説明いただきました。まだ仙台の事例のようなことは起こってないけれども、学者がよく『世俗化現象』と言いますが、寺だとか聖なるものにあまり神経を使わないでも生きられる人々が、確実に増えてきてるんじゃないか、という予測でした。

全国の、特に都市部には「新興住宅地」があります。新興住宅というのはマンションやアパートに住んで、伝統的に土地についた先祖代々続いてきた家とは別な人が都市部に移ってきて、その人たちの価値観であるとか、更には死生観が、元来土地に結びついて永く住んで来た人たちとかなり違うんだろう、ということです。

それは、椎名先生のご指摘になったこととも法則が合うわけです。ずっと土地に住んで、先祖代々のしきたりや価値観も共有してきた人たちと、後から流れてきてそこへ集まった人たちとは、かなりこれから違った対応を寺がとらないと、大変なことになるということを示唆なさったと思います。

あとで問題になりますが、非宗教化、世俗化っていうのが全国的に進んできて、そこに合理主義教育というものが加わり、理に合わないことにはお金を使わなくていいという雰囲気があるようです。理に合わなくてもお金を使いなさいというのが従来の冠婚葬祭で、お寺さんでも、神社でも、ある程度そういう習わし、しきたり、つまり文化の上に立って運営をしていたのです。それが現在になって、寺院と檀信徒をつなぐその絆にいろいろな問題が出てきて、今、若い世代に、そういう寺にとってマイナスになるような雰囲気が生まれているのです。

この問題を椎名先生はどういう風にご覧になりますか。

椎名　お布施の金額というのは、本来、寺側から言うべきことではなくて、布施というものはこういうものであるという、「布施の本質」を示すということが大事なことではあるはずです。具体的な金額が問題なのではなく、あくまでも檀信徒の側が、喜んであげさせていただくと、こういう気持ちでいていただくのが本来の姿だと思いますね。

ですから、私は昔から、どんな法事であろうと葬儀であろうと、棚経であろうと、私の方からは、金額について口にだしたことはありません。「少ししかあげられないんだけど」と言われたら、「あぁ、いいんだよ。気持ちが大事なんだよ」と言ってきました。そういったようなことは一貫しておりますから、地元の檀家の人は布施についてはまったく聞いてきません。

ただ、都市部に住んでいる方は、仏事の際に「どのくらいお包みしたらいいのでしょうか」と訊いてくる方はいます。そういうときには今申したことをお話しして、「それは、故人に対する供養の気持ちがいちばん大事なんだから、お供えしてくださればいいのですよ」と話しています。

佐々木　椎名先生は、お布施っていうのは、住職のほうからいくらと言うふうな問題じゃなく、檀信徒の信仰といいますか、お寺を敬愛するとい

うところから出た、気持ちの問題だとおっしゃるわけです。私もそう思います。気持ちでお供え頂くものだと。

二〇〇八年九月一六日発行の東京新聞「生きる 心のページ」におきまして、最近、活躍しておられる宗教社会学者、井上治代さんの「家族葬墓地の最新事情」という記事が掲載されました。そこで井上さんは、『「葬儀にかかわる費用等調査報告書」（東京都生活文化局発表）をみると、自分の葬儀を『親しい人とこぢんまりとしてほしい』とする人々が、二〇〇一年調査で全体の葬儀の約六割ある」と書いています。さらに「『葬儀を行なって欲しくない（家族だけで埋葬）』という回答を加えると、七割を超えている」と。つまり七割を超える人々がこぢんまりとした葬式をしてもらいたいと、こう言っている。葬儀がだんだん小規模化して、お坊さんも一人でいい、という時代が来ているということですね。

さらに、「全国平均で約四〇万円かかる戒名は、七割が『不要』と答えた」とあります。このような近年の死者儀礼の傾向を、井上さんは『「私化」および『個人化』、そして『脱・宗教化』と捉えている」と言っています。なぜ、こういった私化した葬儀が増えてきているのか。その背景として「戦前の『家』は、家族員である個々人よりも、『家』という『集団』が単位となった社会であったが、現代は『個人』を単位とする社会へ移行した」と指摘しています。かつては、葬儀を簡略化するようなことをしたら、先祖が我々を恨んだり、面白くなかったりというような、そういう定まった位置に、家の先祖があった。「現代は、こういった家や先祖を中心とした考えが希薄化し、自分という個々人が関わりをもった人と結び合って、ネットワークを形成している」つまり「個人化した社会の到来である」と井上さんは結論づけています。さらに「個人と一対一の関係で取り結ばれている関係は、個々人が亡くなれば、集団が単位であった時代のように子どもに受け継がれることはなく、その関係は消滅するのである」と。

こういう状況で既成仏教は、どうしていけばいいのか。家の系譜尊重から、個人の意志尊重へと変化してきた。そして、世界観やあの世観や死者をどう意味づけるかという死者観が変化してきた。これと、既成仏教がどう対応すべきなのかという問題とは、表裏になっています。ここをめぐって、おふた方のご意見を頂戴したいと思います。

椎名　対応の前に、もう少し現実を直視しておきたいと思います。普遍的な社会現象というものは、葬送儀礼からファッションに至るまで、代々日本では東京が発信地です。東京から関東へ広がり、それが全国へ波及して行くというのが一般的なパターンだったんですが、葬儀の家族葬という形態は、京都が発信地であって、大阪へ広がって、それから東京へ来たという、従来と違うパターンだったようです。この話をこの前、碑文谷創先生から承りました。もう京都は九割が家族葬で、大阪は七割であると。東京はまだ五割に満たないが、どんどん増えていると、こういう話を承ったのですけれども。今では、もう五割を超えていると思うんですよ。どんどんそれが関東圏に波及してきている。拙寺の檀家でも、最近三軒ほどありました。

そこで、家族葬を行った方に「どうでした？」って聞きますと、「心からやれたことが一番うれしかった」と、こう言うんです。日本人は近年、「心から」ということを非常に重んじてきておりますので、それがまさに家族葬を肯定する大きな精神的な求めと合致していると言えるのではないでしょうか。個人を単位とする社会にあって、これは一つの象徴的な現象であろうと思われます。

私は家族葬がだんだんと地方に波及して行くのではないだろうか、と思っています。地方ではもう、自宅葬が急激に減ってきます。斎場葬が圧倒的です。それが家族葬的なものに変わって行くのは、もうそんなに遠くはありません。急速に波及して行くのであろう、これを視野に入れておかねばならない、と思っています。

佐々木　かつては地縁血縁で成り立っていた葬儀が、家族・親族中心の小規模な葬儀に変わっているということですね。

大友　そうですね。仙台のお寺さんでも結構個人葬が多くなったと聞くようになりました。さきほどのご葬儀をしなかった檀家さんに「ご親戚に報告しないんですか？」と申し上げましたらね、煩わしいので参列をお断りしたのだそうです。故人のご兄弟、一緒に育ったご家族にお別れさせてあげようという、情が希薄になってきているのかなと感じます。

それに、葬儀がイベント的なものになってしまったと思います。葬儀屋さんが作り出したイベントに一般の方が乗ってしまって、それを僧侶が食い止められなかった。僧侶がもっときちんとしたものを持っていなければいけないんだけれども。人に人間哲学を教える僧侶がそんなことでは絶対にダメだって思いますよ。その辺のところの怠慢さがツケになったんではないのかとも思います。

あと、この頃はね、なくなっちゃたんです、水子供養してくださいっていう若い子が。それも仏教離れと言うのでしょうか。宜保愛子さんのような方がいなくなってからこれがなくなった。語らなければダメだと思います。こういうものだ、ってことをしっかり言って欲しいです。

佐々木　今、友さんから非常に重要な指摘があったと思います。現場の経験の中から帰納されたご意見だったと思うのですが、ひとつは、葬儀社に住職が妥協して使われているという問題。葬儀社を善導していくのは僧侶であるはずなのに、もっと葬儀社にものを言わないといけないのではないか。反面、「檀家が少ないと手当てはできるだろうけど、檀家が多いところでは葬儀社にある程度乗らないと仕事にならない」とおっしゃる寺もある。これは非常に危険な考え方ではないかということを、私はある集会で述べたことがあります。

今、大友さんはズバリそこをおっしゃったわけでね。しかも、葬儀社に宗教性とか仏教性があって導くならいざしらず、僧侶の方がそれに乗っかって、数十分の間だけ衣を着て携わるっていうことでは、影がだんだん薄くなっていきます。

第二に、宜保愛子のように、水子が、親の恣意によって犠牲になり、あの世に行って、非常に悲しんで寂しがっているから、あの世のことを慮ってもっとお地蔵さんに手を合わせなさいとか、供養しなさいという見解。宜保さん的なものを我々は「民俗」と呼んでいる。日本社会や文化の底辺にずーっとあった原初からの宗教性みたいなものです。お坊さんがなぜ必要かという理由には、きちっとした葬送をしないと、あの世に行った者がこの世に対して仕返しをするということがあったのです。これは「祟り」とか「障り」と言いました。宗門や仏教界では、人権問題が起きてからそれを説けなくなったということがあります。これも近代化のひとつですが。

代わりにあの世観を述べる上で学問上の何かがあるのかというと、ない。それで、お坊さんに答えをと求められても答えられない。お坊さんの大部分は大学教育を受けたインテリでありますから、「あの世って何？」ということになる。死者の人格を仮に霊というとして、「霊というものはどういうものか？」と聞いても、答は出てこない。なぜ

ならば、そういう素養を培ってこなかった。大学でも僧堂でも。死者を供養することによってお布施も入っていたのに、死者の行方であるとか、死者とは何ぞやという意味づけについては、どの教団でもそこは欠落している。これが問題なんですよ。

やっぱりベースにあるのは、霊の観念、魂の観念、あの世の観念です。だから、新宗教であの世を説くのが盛んになってきているし、スピリチュアリズムという新しい動きもそこに焦点をおくのに、実はそこに乗っかってやってきた仏教が、一番手薄になっている。もっと仏教は高度なものであり、高いものであるという立場です。実は高度なものだから民衆になかなか直接に結び付けなかったのですが、そこを支えてくれたのが、祈祷師であるとか宜保さんのような、インテリからみたら眉唾ものの人々が民衆の世界観を支えてきた。そういう人がいなくなったとき、まともにお坊さんに「あの世は何ですか？」と聞いても、「いや我々は無記だから答えられません」でしょう。「答えられないのに、なんで高いお金を払わなくちゃなりませんか？」ということになる。これがもっともリアルな問題だろうと思いますが、椎名先生、その辺いかがですか？

椎名　はい。まず最初の葬儀社の問題。これは各寺の住職が、葬儀がどこで行なわれ、どんな規模で行なわれるに関わらず自分が主宰者である、という気持ちをもっていかないとならないと思っております。私は「導師は葬儀全体のチェアマン、主宰者である。宗教的なチェアマンである」と書いて、その都度、葬儀社に印刷物を渡しております。なぜチェアマンなのかとか、施主はこの位置に坐ってもらうとか、そういう個々の事をたくさん書いております。遠くの場合でも電話で前もってポイントだけをいくつか話しておいて、当日三〇分前には遅くとも行って打ち合わせをする、というようなことで徹底を図っております。それがやっぱり大事ではないかと思うんですね。どんな規模であろうと、それは問題ではないんです。

それからもう一つ。水子供養と霊の問題ですね。これ、非常に重要な問題だと思います。実は私のところで毎年、水子供養と言わないで、「嬰児慰霊供養」を、春、三月の末か四月の初めの土曜日に盛大にやっております。

というのは、私のところには赤ちゃん専門のお墓があるんです。千葉県では五～六社、産院から早流産等の嬰児を引き取る業者がありまして、自分たちで火葬場を持って、火葬しているんです。そのうちの二社が私のところに入っていて、墓地に施設を作って納骨しています。その業者が、納骨の時に持ってくる埋火葬許可証を見ると、半分以上は両親の名前がありません。お母さんの名前だけですね。

その中から厳選して供養の案内を出すわけですが、それでも一五〇～二〇〇人位のお参りがあります。そういう人たちに対して、私は「罪」というものの意味をお話ししします。早流産や中絶した赤ちゃんを、余計なものが出来ちゃったといって、引き取りもしないで業者任せにしてしまう。そしてヤレヤレ、と。こういうような者は罪を背負わなくてはならない。今日おいでになった皆さんは、逆に善業を積んでいる。あなた方が善業を積むことによって、赤ちゃんの霊は浮かばれる、成仏できる、というような施食会と同じような意味の説明をいたしまして、列席者たちが、宗教儀礼や悼む心は大切なんだということを少しは分かってもらうようにしております。そういう宗教的な契機を与える努力が住職の大事なつとめであると思います。そしてまた、亡くなった人は見えないけれども、それは存続しているんだということを、葬儀の場でも嬰児供養の場でも努めてお話するようにしています。

佐々木　ここがね、椎名先生、教養のある人ほど言えなくなっているんです。「うちの霊はこれだけの葬式をしてどうなっているんでしょう？」って言うと、「さぁ、お経にはこう書かれてある」とか、「先生からこう教えられたから」というところで止まってしまう。意識的には仏教は空無を説く宗教であって、霊や魂とは関係ないのだから、そこを肯定したら、後ろめたさが残るというような、知的なものがお坊さん方にあって、それが現場の僧侶の立場を弱めているのではないでしょうか。

仏教にもいろいろな歴史や展開があるけれども、日本仏教ではやはり仏様の力によって亡き人をあの世で浮かばせることが大切な役割を果たしてきました。ここを日本人が望んだからこそ、仏教はこれだけ民衆化したのです。そして浄土真宗であれ、法華宗であれ、禅宗であれ共通項となっているのは、霊をどれだけ安定させ、そして守護神化、守護仏化させて一門を守ってくれる存在にするかということだと私は思っています。そこのところを、これまで学問は強調できなかったと思うのです。

椎名宏雄老師

ひと口に仏教といってもたいへん大きな概念であって、お釈迦さんの教理、両祖の教理も仏教ですが、私はそういう仏教を、教義仏教とか教理仏教と言っています。その教理仏教を踏まえて現場で民衆と接するところが寺院仏教。機能上はそういうふうに一応区別していますが、この二つは重なっています。教理仏教と寺院仏教は別々のものであって別々のものではないのですが、どうも仏教というとすぐ「縁起です」「空です」ということになってしまう。それを求めて檀信徒は寺に来ますか、ということです。もちろんそれを求めて来る人もいます。でも大部分は、水子の問題だとか、施食会はどうしましょうとかの用事で来ているわけです。ところが教義を背景にすると、なかなかそれに応じられないというのが現実なのではないでしょうか。

最後になりますが、現在の仏教環境、宗教環境というものを背景にして、これからお寺さんはどうあればいいかということを、大友さんの方から問題提起していただければ。

大友　よくお檀家さんを知ること、そして慕われることだと思います。それは寺族の務めだと思っています。寺族はやっぱりお寺に入って、方丈さんの補佐をしていくことが大切です。補佐という言葉を良くないっていう人もいるけれども、私は補佐で十分だと思います。なぜなら、衣を着て引導を渡す側ではないから。方丈さんがお寺をきちんと守って、自分の本来の仏教をきちんと語って、筋を通してくれたら、寺族は一生懸命それのお手伝いができます。それをうまくコミュニケーション化していくことが寺族の務めです。

うちの方丈は教員を辞めてから僧堂に入りました。そこで、五〇歳にしてお茶を出すことを覚えました。それまでヨコのものもタテにしなかった人が、お茶を出すことになり、お茶碗も洗えるようになり…。修行に行ってから本当に変わりました。だから、和尚さんの修行ってすごいなぁと思いました。やっぱり、そういうことを越えてきている人、だからそれを私たちが補佐する。

例えば、婦人会があって、

本堂の掃除ということがありますね。そうすると、皆さんが灰ならしから、全てをやってくれます。でも須弥壇上には方丈さんしか上げません。方丈さんが自らお釈迦様の掃除をします。皆さんはそれを補佐します。そういう風に、「須弥壇は和尚さんしか上がれない大変大切なところ」というのを皆さんに自覚してもらえます。檀信徒と一緒の行動をして、でもそこにきちんとした尊厳を見せている。こういうことだよということを位置づけておく。そういう形に自分でなりたくてなるんじゃなくて、自然にそうなっていきます。

それに、悩みのある人は必ずだいたい覚えています。嫁と喧嘩して死にたいと言って来た婆ちゃんがいたら、まず坐らせといて、そして熱いお茶を持って来て、「どうしたの？」とか話をします。その間二～三時間、うちの方丈は一歩たりとも本堂に入りません。「また始まったな、うちのお母ちゃん」って見てて。そこは協力してくれていて、それで檀信徒さんとの心のコミュニケーションができます。

大友淑子さん

私は自分の考え方で、生き方で、そういうことをやってきました。宗教とかそういうことじゃなくて、人間対人間として、そして先祖を預かる側と、預ける側とのコミュニケーション。それを形式ばったものじゃなく、もっと柔らかくなっていくといいのかなあって。そうすることで、自然についてくるんじゃないかなって思います。

佐々木　「これからの寺院仏教の在り方」という、大きなテーマであったのが、今の話で、清水寺さんの寺族というか、奥さんのあり方は、大変参考になります。寺族が出すぎると、方丈さんの影が薄くなるという場合もあるんだけど、ちゃんとそこを意識なさって、自分の役割と方丈さんの役割を、きちっと分けて考えておられる。

それからもう一つ大事な点は、方丈さんが五〇歳になってから修行をして、修行から帰って来たら、非常に変わったと言われたこと。須弥壇上にあがって本尊様のお掃除をするのは、なぜご住職でなくてはいけないのか。それは、まさに修行であり、その修行が坐禅だとすれば、坐禅から滲み出す、禅定力のようなものが存在するからです。その禅定力が、檀信徒に対しても仏教の核心を突くような話になっていき、そしてまたインテリたちに対しては知的なレベルで作用していくわけです。

こうした禅定力と寺族の問題で、椎名先生、最後にひとことお願いします。

椎名　禅定力というお話でございますが、葬祭でもご祈祷でも、まさしくそれが一番大事ではないかと思います。歴史的に見ても、禅宗のお坊さんがなぜ民衆から信用されてきたか、何をして一人前の資格を得てきたのかといえば、坐禅が中心なんです。その坐禅がなぜ、今は行われていない寺が多いのか？

坐禅会に集まってくる人達も、何かを悟るためじゃない、何か力を持つためじゃない、ということだとですね、目標が定まらない。私はそうじゃなくって、坐禅をし抜いていった先にはみんな、悟りとまでは言えなくても、何かがあるんだ、具わるものがあるんだ、ということが大切だと思います。それは宗門の先輩方、偉大な方々を見ればもう、この通りだという事例はいくらでも指摘できる訳でございます。それにはやっぱり住職が自ら坐るということが大事なんですね。人が来ても来なくても坐る姿勢をもって。

私は、寺離れは必ず進行して行くと思います。これからは、個人が個人を求める時代だと思うんですね。そういう時代に問われるのは、やっぱり寺院住職の力量であろうと思いますね。民衆が聖なる僧を求める基準は、曹洞宗の場合は禅定力であろうと。これを具えている者が求められると思います。あの人は坐り込んでるからやっぱり違う、というものがなければ自然淘汰されてしまうんじゃないかな、こういう風に思っております。そういう意味からも、住職たる者は宗教者としての力を発揮して頂きたいですね。

佐々木　ありがとうございました。今、椎名先生から、今日も中心課題のひとつであったお寺離れ現象は今後、ますます進むであろう、とありました。個人個人の時代だから、個人が寺を選び、住職を選ぶような時代が到来すると。それで、修行を積んだ尊敬されるようなお坊さんと、そうでない人がいるとすれば、そうでない人は自然淘汰されていく。私もそう思います。

そこで、お坊さんらしいお坊さんというのも原点はどこかというと、曹洞宗は坐禅宗であり、つまりそれは坐禅にあると。とにかく坐っているという迫力が、普通の人ではできない霊界の存在を成仏させる。それだけの力が坐禅する身には備わっているのだという言葉は、人を納得させます。力の原点は坐禅にある。坐禅と葬儀や祈祷の儀礼というのは、分離してはだめだということを椎名先生は強調されましたが、私もその通りだろうと考えるわけです。

今日はいろいろな立場から話ができましたことを非常に有意義だと思っております。それでは、これで終わりたいと思います。ありがとうございました。

曹洞宗隆盛の基礎づくりに貢献した瑩山禅師の日記「洞谷記」が、現代語訳と詳細な注釈、さらに図解や系図、有識者からの寄稿などを含めた『現代語訳 瑩山禅師『洞谷記』』（春秋社刊。以下、『現代語訳版』）として出版されました。長年、少ない資料を元に瑩山禅師を研究してこられた東隆眞老師（大乗寺）の総監修の元、続く世代を中心とした『洞谷記』研究会の賜物は、これまで降ろされていたベールを開け、新しい史実を届けてくれる珠玉の一冊でもあります。本書の制作に多大な貢献をされた研究会の中心的存在、駒沢女子大学・安藤嘉則学長と、同じく研究会の発起人でもある善福寺（山口県）住職・大野徹史老師に、制作の背景と研究における瑩山禅師への思いをお話いただきました。

『洞谷記』で瑩山禅師を知る意味

安藤　我々にとって道元禅師は大きな存在であり、『正法

眼蔵』を初めとする著作や関連資料が多く伝えられ、お寺での法要や坐禅会などでは、『修証義』や『普勧坐禅儀』が読誦されてきました。道元禅師の教えと接する機会は多いですね。一方、瑩山禅師については、『伝光録』などの典籍は残されましたが、ご自身のことを伝える歴史的資料も少なく、また、ふだん瑩山禅師の教えに触れる機会も少なかったと思います。

そんな中で昭和五七年に、東老師がご自身の研究結果を『洞谷記に学ぶ』（曹洞宗宗務庁刊）という著書にまとめてくださり、そこで瑩山禅師が当時どのようにして門弟を育成し人々を教化されていたかを明らかにされました。それまで瑩山禅師の実像を知るのにどのような資料があるのかさえ、あまり知られていませんでした。大野さんもまず初めに、『洞谷記』がどういうものか定義づけのような作業をされましたよね。

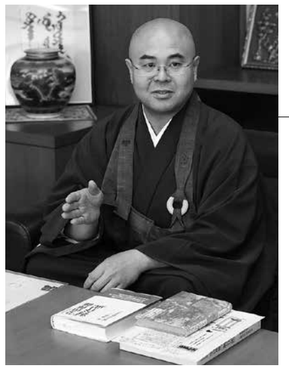
大野　そうですね。まさに最初の発願は、瑩山禅師の実像をよりはっきり知ることでした。そのために『洞谷記』に関することを集めて整理したかった。いつかは今回の『現代語訳版』のような形を目指してはいたものの、まずは資料蒐集、写真撮影など全ての資料を整理し翻刻することから始めました。それは二〇一五年に『諸本対校　瑩山禅師『洞谷記』』（以下、『諸本対校』）という形で世に出すことができました。この時も東老師が大変応援してくださり、出版社との調整や話し合いに随分ご尽力くださったんです。当初、できるだけ多くの方に役立ててもらいたかったので、写本を全てカラー写真で掲載しようしたんです。そのためにページ数が多くなり、出版費用がものすごく高額になってしまいました。結果的には活動を応援くださったご寺院様方からご寄付をいただき、なんとか提示された金額を集めることができましたが、ご支援の全てをここで使ってしまっては、現代語訳研究や出版費用に足りなくなってしまいます。そこで東老師に相談して構成を変更し、出版社さんにも大変なご協力いただきまして、費用をかなり抑えて出版いたしました。その後の現代語訳研究会の継続と今回の出版は、私の力ではなく、多くの皆様のお気持ちとお力によるものなのです。

安藤　東老師が最初の一里塚を築いてくださったおかげで、大野さんをはじめとする若手の研究者もどんどん参加しやすくなりましたよね。私が研究会に参加したのは『現代語訳版』を作るところからですが、取り組んでいると「なるほど、そうだったのか」と、知らなかったことがどんどんわかるようになる。これができたらすごいものになるだろうな、と思っていました。今回このような形にまとまったのを見て、改めて大野さんの貢献は本当に大きいと思います。

大野　ありがとうございます。ちょっと変な言い方ですが、研究会を始めたとき私はまだ経済力も立場も何もない、ただ気持ちだけで動いたようなところがありました。それでも東老師、ご紹介いただいた研究者や有識者の方とのご縁に支えていただいたと思っています。不思議なもので、皆さん普段からとてもお忙しい方々なのに、その時だけは次々に電話に出られたんですよね。すぐに直接お話できて、ものの一時間くらいで全員にご連絡を終えることができました。安藤先生もあの時、お電話したらすぐに「参加します」とおっしゃってくれましたね。私自身は何もない身なのでとにかく動き回り、事務局長として皆さんへのおうかがいや調整役に徹しました。十年もやっていると皆さんの立場や所属も変わるため、東京で一回会議をしようと思うと交通費だけでも相当な経費になりましたが、それでも出版費用に控えていたご支援には手を付けず、私財やらを手放しながら捻出してどうにか研究を進めることができました。私に何もなかったからこそ勢いをもってやり遂げられたのかもしれません。宗門、本山や大学のお力を借りない単独の研究会運営と出版活動は、他の方から見ると無謀に見えたかと思いますが、多くの方との不思議なご縁に支えられて目標を達成することができました。本当にできるのか不安に思う時もありましたが、今では間違いはなかったと感じています。

駒沢女子大学

大野　昭和五七年に東老師が『洞谷記に学ぶ』をまとめられた時は、元の『洞谷記』の約3～4割が対象でした。ご本人からお聞きしたことですが、それは解読が難しかったというよりも、その時の焦点が、「道元禅師のみが純粋な仏法で、瑩山禅師は道元禅師の仏法を堕落させた」というような瑩山禅師への誤解を解くための「仏祖正伝の正法」にあり、ページ数の制約や、また北陸の風習や他宗教に関する語句が多い『洞谷記』に更なる誤解をもたれることがないように、などの意味があったそうです。インターネットもメールも交通手段も今ほど整っていない四、五〇年前のことを想像すると、瑩山禅師に対する誤解が広まっている状況で何度も北陸に現地調査に入られ、資料を集められた東老師がいかにご苦労されたかは想像に難くありません。それでも東老師は、ここまでしかわかりませんでしたという姿勢をもって出版され、後にわたくしが『諸本対校』を作りたいと相談した時は「『洞谷記に学ぶ』は踏み台だと考えて、どうぞ進めてください」と言ってくださいました。今回『現代語版』まで出せたことで、すでにいろいろな方面から反響が寄せられています。同じく瑩山禅師の研究をする方からは「今まで歯が立たなかったところが読めた」と言ってもらえたり、他の宗派の方からも「瑩山禅師がいかにすごい人かよくわかった」とお礼状をいただいたりして、その度に「あぁ、やっぱりやってよかったなぁ」と感じています。


大野徹史師

安藤　私も最初に研究会のお誘いをいただいた際は、まず研究者として、非常に魅力的なお話だと思いました。『洞谷記』の写本など、瑩山禅師の第一次資料に接しながら、他の新進気鋭の研究者たちと意見交換できますし、瑩山禅師以降、大きく発展していく曹洞宗について研究していく上で大きな手がかりを得ることができたと思ったからです。

『現代語版』を手にして欲しい人とは

安藤　まずは大学などで一生懸命に仏教を学んでいる学生の皆さんですね。それから、今現在お寺で檀務をはじめさまざまな活動をされているお坊さんたちに読んでもらいたいですね。曹洞宗の教えを学ぶということは、まずは道元禅師の本を読みます。ただお寺でのさまざまな教化活動の現場では、檀信徒との接点が葬儀など仏事関連である場合が多いと思います。その場合、その地方の独自の慣習への順応が必要であったりして、道元禅師の本で扱われない領域が、現実のお寺で教化活動のメインとなっていて、そうした道元禅師の宗旨とのギャップに戸惑いを感じる方もおられると思います。そのギャップを埋める一つの手がかりとなるのが『洞谷記』だと思います。『洞谷記』には瑩山禅師がいらっしゃった永光寺の当時のさまざまな教化活動が記され、また当時の民俗風習なども反映されています。また何月何日に九州から会下の大智禅師が語録をたずさえて来訪した、などと日記風に記録されて、読んでいると瑩山禅師の息遣いまで感じられるような思いがいたします。そして、この『洞谷記』に接することによって、七〇〇年前の瑩山禅師の教化活動と、現在の私たちのお寺での教化活動との繋がりが確認でき、自信をもってお寺での檀務に向き合うことができるのではないかと思います。

大野　実際によく聞く話ですが、道元禅師のお示しされた書物などには、今の寺院で日常的に行なっている掃除、法事、御祈祷などが出てこない。一般の人からも「葬式、法事ばかりしていて僧侶はそれでよいのか」などと問われたりする。本当は、道元禅師も法事、御祈祷や地道な社会活動をされていたのだけれども一般的な道元禅師の解説本にはほとんど書かれてないわけです。

そこで瑩山禅師を知ることで、「自分は今、手前勝手に掃除をしてるのではなく、道元禅師の教えと同じことをしているのだ」と実感できたらどうでしょうか。道元禅師が伝えた坐禅の功徳をより多くの人に届けるためにも「この掃除が欠かせないのだ」と自らの行動を信じていられるのではないでしょうか。掃除だけではなく、履物を揃えたり顔を洗ったり歯を磨いたり、日常生活全てにおいて共通しているのだ、とお坊さんたちが答え合わせできると良いですね。

安藤嘉則師

安藤　曹洞宗は寺院数が約一万5千ヶ寺といわれますが、数が多いだけでなく、懐の深さがあると思います。坐禅修行に専念し純粋に仏道を極めていくお寺もあれば、各地域で菩提寺として人々のご先祖のご供養するお寺、あるいは稲荷・竜神・火防の神等をお祀りしてご祈祷でご利益を人々に与えてきたお寺など、さまざまです。そうしたお寺の「多様性」も曹洞宗の特徴であり、この『洞谷記』に書いてあることは、その後の曹洞宗のお寺のあり方の方向性を示すものがあると思います。

大野　特に地方などでは、小さなお寺で檀家も少なく、お寺のことだけでは生活が成り立たず平日に他のお仕事をしている方もたくさんいますよね。そうした中には、せっかくお坊さんになったのに自信がなさそうだったり、どこか心細さを抱えたりしている人もいます。道元禅師をしっかり勉強された人でも、学んだことが発揮できずにいる自分へのマイナスのイメージを心に積み重ねてしまい、心を病みそうになっているというような話を聞くこともあります。でもそれでは、お寺にお願いする檀家さんたちも不安になってしまうことでしょう。お坊さんたちにはどうか自信をもって、他の仕事を含め今していることが大切な修行なのだ、とこの本を通して伝えたいです。

仏のごとく敬う檀那のこと

安藤　21世紀は地方の村落共同体が弱体化していき、それまでその地域で菩提寺として大きな役割を果たしてきたお寺もその運営に厳しさが増している状況です。檀那の方々や地域の方々にとって「お寺の役割は何か」と自問するときでもあるでしょう。そうしたお寺の原点を考える上でも『洞谷記』は意義ある書ではないでしょうか。瑩山禅師は地域や自分を支えてくれた人への感謝を繰り返し残して、檀家さんたちをうんと大事にしました。はっきりと書いてありますよ、「檀那を仏のごとく敬うべし」と。それが曹洞宗を大きくしたことに違いありません。私たちが檀信徒に向き合う基本精神であり、さらには社会全体へその精神を広げていく必要があるのです。

大野　地域によってもお寺が抱える課題も様々ですよね。大変ご苦労されて精一杯の方々もいらっしゃると思います。瑩山禅師がされているように、ご自分の能力を余すことなく地域や檀家さんのために使うことは、私たち僧侶の役割だと思うことがあります。例えば、檀家さんが公的書類の作成に困っている時、役所などで公務員をされている僧侶の方ならば的確に助言できるでしょうし、草刈りができるならご高齢者に代わって草刈機を使うとか、足腰の弱い方のためにゴミの収集日には自分のごみ捨てのついでに運んであげることだって喜ばれることかもしれません。ボランティア活動や社会福祉事業への貢献も同様です。檀家さんがいない、少ないという意味においては、海外のお寺でも同じことを聞きます。海外のお寺はとてもよく坐禅修行されていますが、もともと檀家はありません。寺院の維持管理費は坐禅会の会費や一般からの寄付で賄われています。足りない部分は自らが外に働きに出かけ費用を工面してるのです。地域文化に合わせた坐禅会、寺院運営などを工夫されて人を集めている寺院もある一方で、お寺を支える方の獲得に相当苦労されているところもあります。本質的には、日本国内のお寺と同じ悩みかもしれませんね。以前、坐禅だけでは思ったほど人が集まらないので「転読大般若」の祈祷太鼓の叩き方を教えて欲しい、梅花法要や音楽法要のやり方を教えて欲しい、典座料理に関することを教えて欲しいなど、海外のお寺から様々な要請を受けたことがあります。坐禅の功徳を展開する為の具体的な活動方法教えて欲しいと助けを求めているお寺が多いと感じました。日本の僧侶の方で、もしも今ご自分の才能やこれまで体得した学びを活かしきれてないと感じているお坊さんがいたら、海外でなくともそうしたところに出向くとか、今ならオンラインだって様々なことができるので、どんどん貢献の機会を見つけられると思います。色んな仕事をすることで見えてくる世界は必ずあるはずですし、それこそ瑩山禅師は坐禅を中心としていくつものお寺や僧侶を手助けした人です。もちろん瑩山禅師をよく知らなくても、すでに瑩山禅師のような活動をしていらっしゃる僧侶もたくさんいます。そういう方がもっと活動しやすくなったり、同じように積極的な社会活動を始めるお坊さんが増えたりすることも曹洞宗全体にとって大切です。実際、曹洞宗はその団体の大きさのため、組織としての変化はとてもゆっくりだと言われますが、でも個人の活動の集合体でもありますよね。

『洞谷記』が示したもの

安藤　「私が『洞谷記』を読んで驚いたことの一つに、瑩山禅師がいくつもの重大な決断を「夢」に出てきたことが理由で決定していたことが挙げられます。親鸞聖人の六角堂夢告や高山寺の明恵上人の『夢の記』も有名ですが、中世の仏教における「夢」の意味は大きいものがあります。瑩山禅師が夢告を大切されたことの意味について今後も検討する必要がありましょう。ところでお釈迦様は『法句経』で「ものごとは心にもとづき、心を主とし心によってつくり出される」と示されています。今、目に見えているこの世界は私の心の反映である、と。だから「私」の人生は「私」の認識そのものであり、いわばわが心が変わると世界が変わるわけです。自分の世界のど真ん中に主人公として「私」があることなんですね。決して人様を中心に置くのではないんです。瑩山禅師における夢の位置付けも、夢がわが心の反映であることを重視されたのかも知れません。

大野　奇しくも今は世界的にコロナ禍となりましたが、鎌倉時代の道元禅師は、当時の生活様式に衛生観念を持ち込んだ人物でした。特に修行道場では大勢が共同生活をしますから、履物を履き替え、袈裟や法衣を脱いでからお手洗いに行くことなどを示されました。一〇〇年後の瑩山禅師も、それを引き継いで展開し『洞谷清規（瑩山和尚清規）』を書いたとされています。そこには朝起きてから寝た後までの日分、また月分、年分の生活様式、規範、儀式がまとめられています。でも、だからといって建物の大きさや地域の異なる寺院に対しても絶対にそれを守らせていたわけではありません。地域や状況によって変化することは当然という認識があります。ただ中心核にあるものを示すことは欠かしませんでした。中心をしっかり根付かせて、同時に裾野は柔軟に広げるという、曹洞宗の基盤に繋がっていることです。

編集後記

藤木隆宣

8月12日（木）児童養護施設「手まり学園」のお盆のお参りをした。ホール棟にある仏壇に3ユニットに分けて行った。

①静座（お盆の回向も入れる）
②お盆の話（理事長）
③一行詩作成（園長）
④手まり学園のお約束三原則（園長）
⑤静座の約30分であった。

一人一人にご先祖がいらっしゃることを伝えご先祖はみなさんを見守っていますよと話した。駒澤大学の児童教育部に所属していたので4年間の日曜学園、夏の全国巡回などが役立っている。昭和年代に児教はなくなり、お寺で子供と接する機会が持てなくなったのは大きな損失である。子どもと対面している時は実に充実している自分がいる。幸いに曹洞宗寺院では夏に「緑陰禅の集い」が企画されている。子どもたちがお寺と親しむ機会があることは将来大きくなってそのことがよみがえるときが来る。お寺の思い出はと聞くと、日曜学園に行っていたとか、お寺の境内で盆踊りをしたとか、ご法事お墓参りに行ったとか様々だがお寺との縁は多くあるほうがいい。令和にお寺はどのような思い出を子どもたちに残せるのだろうか。都会の人口はこれからも微増、田舎は減少、伝統仏教にとって不利な状況が続く。

檀信徒とお寺との付き合い方が昔に比べて大いに変化して来ている。宮城県の清水寺さんの例は全体から見ればまだ少ないが確かな変化をお寺側は見逃さないことではないか。

根っからの（古い）檀家からはあまりないと思うが、これからはそれすらも油断できない時代だ。

次世代に宗教文化を伝えることは思ったより難しい。勤めに行っている方々にはお寺にお参りする習慣が根付かない。核家族になり若い親にはお仏壇やお墓、年会法要、お寺の行事などがしっかり伝わって行かない面もあり、この問題をどう克服するかはそれぞれのご寺院に課せられたテーマである。

清水寺さんの寺族は檀信徒をまとめるのに必要なことを実に見事にこなしておられる。檀信徒の方々も喜んで努めておられるのでその組織の作り方には感心する。その底辺には檀信徒さんのご先祖に対する思いの深さとお寺側の日頃の向き合い方が檀信徒を納得させるだけの内容があるからだと思う。

ご法事一つをとっても場所はお寺であっても自宅であってもご住職の法話の内容は生涯この住職とお付き合いしようと思わせるものなのだろう。

これからのお寺は従来の檀信徒とのお付き合いと地域住民との付き合いをうまくかみ合わせていく必要がある。何宗であれ仏教哲学から出てくる教えの普遍性、居心地の良さなどを宗派意識にとらわれずに持ち伝えたいものだ。衆生と共に歩む大乗仏教の良さを各宗派で共有してコロナ禍で自分の居場所を探しておられる人々に向き合う必要がある。でないと人々があらぬ方向に行ってしまう懸念がある。よくよく周囲を見回す必要がある。

2022冬・お正月号特集予告

2021年10月30日　発刊予定

曹洞禅グラフ

フリージャーナリストの立場から平和活動を続ける

西村一郎氏の仏教的生き方を問う

にしむら　いちろう
1949年高知県生まれ
公益財団法人生協総合研究所を定年退職後
ジャーナリストとして活動。
2012年　平和・協同ジャーナリスト基金奨励賞を受賞。
『広島・被爆ハマユウの祈り』他著書多数。

インタビュアー｜柳澤 円（まどか）

手まり学園

寄附者御芳名

R3.5.16～R3.8.1

所在地	寺院名（個人名）	金額
東京都	石井友子	5,000
神奈川県	青木義次（93）	10,000
東京都	小林俊孝	10,000
東京都	砂金智佐（113）	3,000
東京都	砂金智佐（114）	3,000
東京都	石井友子	5,000
新潟県	水野寿高	10,000
神奈川県	青木義次（94）	10,000
東京都	石井友子	5,000
神奈川県	青木義次（95）	10,000
合　計		71,000

てまり学園にご支援をいただき
誠にありがとうございます。

仏教企画発行の刊行物

（★部数により割引があります）　すべて税別価格です

『修証義』解説　丸山劫外著	1,400円★
『うたい継ごうよ、子守唄』　長田暁二・西舘好子共著	1,200円★
『まんが問答一期一話』　文 平和宏昭　まんが 垣内敬遠	1,200円★
『葬送のしおり』　長井龍道著	30円
修証義読本『生老病死』　須田道輝著	500円★
『曹洞宗檀信徒経典』　須田道輝解説	300円★
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』　霊元丈法著	140円★
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』　霊元丈法著	150円★
随想集　玉崎千鶴子　その永遠の世界を探って	500円
『観音の咒 大悲心陀羅尼』　渡辺章悟著	500円

＊『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。（消費税、送料別）

曹洞禅グラフ

発行日	
春 彼岸号	2月10日
夏 お盆号	5月30日
秋 彼岸号	8月20日
冬 正月号	10月30日

1部 200円

9部以下	200円
10部以上	150円に割引
20部以上	135円に割引
50部以上	130円に割引
100部以上	120円に割引
200部以上	110円に割引
300部以上	100円に割引
500部以上	90円に割引

発行所：仏教企画
定価：本体 500 円＋税

観音の呪 大悲心陀羅尼

渡辺章悟著

お求めは下記お申込先までご連絡ください

お申込み

仏教企画

〒252-0116　神奈川県相模原市緑区城山4-2-5　※住所・FAX番号がかわりました
TEL: 042-703-8641　FAX: 042-782-5117　Email: fujiki@water.ocn.ne.jp

※ご寺院名後の番号（3桁もしくは4桁）がお客様番号（コード）になります。
お申込みは　①ご寺院名　②お客様番号　③電話番号でも可能です。